

地域社会における仏教福祉

梶 原 重 道

(超善寺住職)

大衆を離れて仏教はないように、いつの時代もそうであろうが、今日のような社会状況の複雑多様化の中では、大衆のために仏教の、地域社会に果すべき役割はまことに大きく要請される。

それに応えるためには、複雑多様化した社会の実態を把握し、またその原因を探究すべきことは当然であり、いわゆる社会即応の態勢による仏教の活動がなされねばならないことは云うまでもない。

そのことは仏教教化の当然の目標であり、使命であるからである。

社会福祉の課題は、今日の社会の複雑多様化の中で、いかに進展したとはいえ、大衆の精神福祉は決して安定してはい

ない。

各種の政策や条例は、一応整ったかにみえるが、時代が生んだ精神の空白は、エアープケットに等しいのである。

むしろそれだけに、整備され、発展されつつある社会福祉の行政や、その法令の逆用は却って、不幸を招来しつつあるのが現状である。

その最も大きな原因は、砂漠化した精神の荒廃に起因すると云えるであろう。

だからこそ「仏教福祉」への要請は大きく、その期待は切実である。

要約して、経済の高度成長期と、科学の巨大化がもたらせた後遺症に対して、地域社会における寺院が、即仏教福祉セ

ンターとして、その教化が即大衆の精神福祉として機能を發揮すべきである。

たとえば、現代の三大社会問題と慨嘆せられている、一、低年齢の少年非行、二、校内暴力、三、家庭内暴力が各界で論議され、その原因探究と対策に大童の状況である。

かつてなかったこれらの暴力沙汰は、その精神の根底によつて是正されねばならない問題であり、校則や家庭の組織構造の見直しだけでは全治することのない極めて変則な不幸である。

一般社会福祉に併行して、仏教福祉の提唱せられる重大な分野であることを、手近な課題として考えてみるべきであろう。

老人ホームがいかに近代的な設備を整え、科学的運営に福祉の向上に懸命であるとしても、すべての老人は決して幸福ではありえないように。

寺檀関係の特殊性と地域福祉

何としても寺院の地域社会における活動の基盤は、その運営、機能、教化にわたって、寺檀の特殊な関係である。

その特殊性は、永い先祖代々の伝統によることは言うまでもない。

ある時にはその特殊関係の上に、あぐらをかくといわれ、その特殊関係の新しい開拓を忘却して、進取性はないと難ぜられる。

もしそうである限り、寺院の教化機能は精々寺檀関係の間に止まり、およそ地域社会への活動の根拠はない。

したがって最も容易であり、しかも手近かな寺檀関係を確立し、その機能を動力として、地域社会への関連を深めねばならない。

寺檀の職種別区分を細分化し、その実態を把握し、能力や社会的条件等を周知する家族票としての、いわゆる檀信徒名簿の現代帳を整備しておくことである。

そしてその専門職域を通じ、いわゆる社会資源としての活用を組織化することである。

この寺檀関係の密接な特殊性を基盤として、地域社会への連帯性を拡充することが、現代社会への教化策であり、寺院が普及する地域への福祉活動である。

檀信徒の法要儀式のみならず、地域への一般開放による教

化策を、効果的に計画実施すべきである。

現に例えば各寺で行われている、書道等各学科別塾制をはじめ、手芸・裁縫・生花・茶道等の文化教室は、一般社会のそれとは自ら相異なるものであり、教化としての仏教活動の一環として、地域社会の福祉に貢献すべきであることは云うまでもない。

境内地の利用についてもまた、単なる観光寺院としてのみに止ることなく、庭園や草木の育成が、例えば牡丹、藤、萩の寺等その工夫による境内地の名勝を計画実施することも、現代社会の緑化とともに、地域社会への奉仕策である。

現に各地で行われている寺院の公益、並びに収益事業、つまり乳幼児施設をはじめ養護施設、児童遊園、チビッコ広場、老人憩いの家や簡易宿泊、幅広い社会福祉施設等の開設をはじめ、青少年道場、学生寮からガレージ、借家等にいたるまで、寺院境内の社会への提供策にちがいない。

しかもその運営の基本姿勢が、仏教の教化活動として、かつまた寺院解放の社会への奉仕策の一環として、地域住民の福祉に貢献できるのであり、現にその実をあげている例も事実である。

ただし、寺院の常住性、法同舎として、出世舎、精舎、清浄園、金剛園、寂滅道場、乃至は遠離処、親近処としての寺院性格を、何らかの方策で基調として実施運営することにおいて、寺院解放とその地域奉仕への福祉が実現するであろう。

社会福祉への参加

仏教活動の本質は云うまでもなく、それは別として、現代の社会機構を活用して、僧侶及び寺院がそのための奉仕活動を、積極的に行うことが肝要である。

最も効果的であり、直接的なものは、地域における社会福祉協議会への参加、奉仕である。地域における関係機関、諸団体の公的綜合組織体だからである。

最小限地域においては、その単位組織として、校区制、或は連合町会別に各種団体を包含している。

積極的にこれらに参加し、奉仕し、あるいはその役職等当事者となり、地域ぐるみの組織化の中であって、その推進に当ることである。

少くともその組織活動に関心を持ち、そのよき理解者であることが必要である。

その組織内容を理解し、自治体の福祉事務所等との関連を保ち、それらの行政を通じ、その法的裏づけに基き、地域社会における檀信徒はもとより、近隣住民の、ひいては地域社会のニードにより、社会福祉協議会の活用は忘却できないものである。

すでに定着した全国運動の年間行事としては、共同募金、年末たすけあい、善意銀行、日赤募金、献血運動、交通安全と遺児問題、防犯活動、社会を明るくする運動、青少年を守る運動、青少年問題協議会を軸として、民間篤志家としての積極的参加が重要課題である。

少くとも寺院の地域社会との孤立化を、極力解消すべきである。

当面する社会問題の解決について

現代当面する社会問題のうち、

一、青少年非行犯罪の増加と低年齢化

二、校内暴力

三、家庭内暴力

以上を三大の社会問題として取りあげられていることは、

先にも述べた通りである。

1、の問題は近年の一般的傾向であり、ますます激化しつつあることは、何としても憂慮すべきことは論を俟たない。

とくに悪質凶悪化の傾向にあり、先進国的に流動してゆく実状は、注意すべきである。

「遊び型」非行犯罪とか、「薬物濫用」とかの実態は、ますます先進国に肉迫しつつあるといわれる。

そうした非行犯罪の原因について、価値観の多様性が常にあげられている。

さきごろ阪大病院で、新型の神経症が増えている事実の調査研究結果が発表された。

私はこのことが、少年の非行犯罪に関して、そしてその価値観の問題として、見逃してはならない大事な課題であることを感じたのである。

その報告によると、新型の神経症が増加している事実を発表したのであって、しかもその中で、従来の型に属する症状ではなく、どの型にもはまらない新タイプの症状が統出しているとし、たとえば「勉強ができるようになりたい」とか、「友だちができない」などで悩むグループであったり、「何

事にも根気がなく、ふぬけのようなタイプで、人間形成不全に属するもの」とか、「行動が鈍く、無関心による短期間の分裂病」のようなものであると説明している。

しかもこうした新しい分類にもまだ入らないような、各種各様のものがはみだし、つまり「その患者自身の名前をつけねばならないような患者が」その調査対象二九七人中に一七人いたことを報告していることである。

われわれ門外漢には、この報告の内容については解することはできない。

しかしこの事実を、自殺や非行化の多様性に、大きなかわりがあるのではないかと、考えたからである。

あるときは奇想天外といったくなるような、突飛な行動と、決して無関係ではない。と考えるのである。

しかもこの突飛な行動には、極めて危険性をはらんでいることを、承知せねばならないであろう。

私はいまこうしたことを書き加えたということは、現代青少年の問題が、非常に複雑化し、多様化してきた中で、その原因を探り、そしてそのことが、仏教と決して無縁ではなく、今こそそれらを防止し、未然に防ぐためにこそ、家庭や地域

社会に、むしろ積極的に進出しなければならない、仏教徒としての使命をそこに感じるからである。

これらの新型神経症の一療法が、少くともその予防のためにも、仏教進出の意義があり、功がなければならないと考えるからである。

青少年の群がる地域社会の中で、仏教徒が参加すること、仏教福祉とはそんなところから滲みでるものでありたいと願っている。

とくに地域活動として、且つまた家庭との密接な交流関係によって、仏教本来の教化の実を挙げべきである。

家庭内暴力といい、更には校内暴力という異状な事件の続発は、いったいいかなる原因からなのであろうか。

母の愛寵を過保護といわれるまでにうけ、あるときは模範生に近いまでの学校生活でありながら、どうしてある日突然ガラスを破り、友人とともに先生を殴らねばなくなるのである。

それぞれに持ちあわせた欲求不満は、はたして何であるのである。

ケースごとに種種さまざまな理由があるとしても、それに

耐え、それを克服する精神の強さのなくなったことだけは事実である。

枯渴した精神を潤はし、空洞の心を充滿しないかぎり、現代人の幸福はとり戻せない。社会の悲劇を救い、次代を背負う青少年の健全育成のため、あらゆる手段を通じて地域社会に、そしてそれぞれの家庭に、仏の心を与えねばならない。

現代における当面した社会問題を通じて、社会福祉の全域にわたって、冷酷な隙間が生じ、本来の福祉行政が、鉄壁に当りつつあることは、まことに憂慮すべきである。

折角積みあげてきた社会福祉が、どうして隙間風が吹き、かつまた後退と呼ばねばならないのであろう。

法でも行政でもない、それ以上に家族関係が崩壊し、人間相互間に隙間ができ、社会の連帯が稀薄化した、人間それ自身への厳正な反省に立ち戻るべきであると考ええる。

前向きに進行してきたわが国の福祉政策は、却て逆行しつつある現状を鑑み、今こそ政策の福祉ではなく、人間それ自身の精神福祉の充実に鉾を向けるべきであると考ええる。

いわゆる金殿玉楼の形骸的社会福祉の時代は去り、居住者

自身の精神福祉に重点を置きかねば、現代社会を救う福祉対策はどこにあるであろうか。

まさに「仏教福祉こそ」これに代るべき時代が到来したのであり、現代人の飢えをみたす重大な課題をかかえていることを痛感するのである。

都市化社会の中に、寺院の孤立化は絶対許されるべきではなく、地域社会との綿密な連帯こそ、現下の寺院存在の価値であり、教法弘通の使命こそ、教化本来の使命でなければならぬ。

宗教法人としての適格な寺院の運営と、その教化活動が、地域社会における寺院存在の大きな価値であり、その意義を、時代性に即応して検討しなければならないと考えるのである。幕府の檀家政策は、やがて幕府の恐怖であったように、寺檀関係を軸とした地域社会の連帯性を、その原点に還って、真剣に出直しをし、仏教福祉の拠点とし、センターとして活躍しなければ、寺院の存在が現状の儘で公認されなくなる日を、予測しなければならぬであろう。

いたづらに広域な境内と、伽藍を建て、その固定資産税の免除の特典も、いつまで持続されるであろうか。

最小限地域社会に直結して、その関係機関や所属団体の役員ではなくとも、生活保護法に基く生活、教育、医療等の保護申請の方途や、社会福祉協議会を窓口とした、世帯更生の生業資金や、かけこみ資金をはじめ、市町村の小口生業資金の貸出しの相談相手ぐらいの知識を持ち合わせねばならないのは当然の義務ではないだろうか。

福祉六法の詳細は専門職に委ねるとしても、それらに適応する概略ぐらい常識として持ち合わせねばならなかったとさえ思うのである。

市町村や、社会福祉協議会が、窓を開設している、各種の相談種別ぐらゐは、今日の寺院住職とすれば常識として活用すべき段階になったと考える。

それほど社会が複雑に多様化し、その中で生活をする大衆の日常が、今日の社会福祉と切り離しては生きられなくなつたからである。

大衆の、少くとも檀信徒と、そしてまた地域社会との交流の中で暮すかぎり、彼等の生活に直結しなければ、真の仏教教化の任務は果しえないからでもある。

現代の大衆が、社会福祉によって当面の諸問題を解決し、

安住しようとしているかぎり、その社会福祉の実態を把握し、その真相を知らねばならないであらうし、またそれと無関心では、現代の大衆の心はつかめない。

そして帰するところ、現代の社会福祉の範疇では救われな分野までを包括して、仏教福祉の真義と、その安住境を知らせねばならないのが、仏教福祉を提唱する所以であり、また寺院住職の役目でなければならないであらう。

寺院が地域社会から孤立することなく、その地域社会に融合し、その社会福祉の実状の中で住民との関連を保ちうることで、仏教との遊離を親近にし、やがて教化につながることであらうし、最小限度その連帯性による社会福祉から、仏教福祉への課程を辿らせるであらうと考えるのである。

仮りに仏教を信ぜず、宗教を否定するものであつても、社会福祉を拒否するものはいないのが、現実の実態なのである。しかしその社会福祉なるものの実質については、まさしく厳しく吟味しなければならない段階になったことを、正確にチェックすべき時がきたことは云うまでもない。

不消化のままに利用する民主主義と、ご都合主義の得手勝手な自由のもとに、法による制度や、特典を悪用する現代社

会の傾向では、真の社会福祉は望まれない。

真実に生きることを目的とした仏教に立脚した、社会観であり、福祉観が、大衆とともに見直されねばならなくなったと思うのである。

特定のもの、そしてまた強引に法を悪用する、限られたもののみの福祉であってはならない。

「願共諸衆生」の大願は、ただ「往生極楽」だけではない。まさに現代社会福祉への悲願であり、仏教福祉の願望なので

ある。

この悲願成就のために、研鑽を積み、学徒の指導を続けられた畏友恒川教授の遷化を追悼し、「佛教福祉」がいよいよ時代の脚光を浴びようとするとき、教授の急逝を惜しむものである。

乞われるままに稿を起し、教授の還来を請い、佛大の佛教社会事業研究所の、ますますの発展を祈る次第である。